

# 常盤ふるさとまっぷ



制作 常盤校区コミュニティ推進協議会  
 わくわく常盤  
 発行 宇部市教育委員会  
 平成25年(2013年)3月

山口宇部空港



### ①常盤ふれあいセンター

昭和60年4月から恩田と西岐波の一部を併合して、常盤校区行政区域が21自治会で発足した。



### ③南山炭生の炭生跡群

ここには、常盤池の周遊園路をはさんで多くの炭生跡が存在する。総称して『山炭生』という。ここ南山炭生は、露頭も存在し宇部の炭坑発祥の地といえる。日本で唯一の遺構であり、常盤校区の子どもたちとの保存活動で保たれている。



### ④常東の炭生跡

常盤池周辺には、山炭生・金吹・東切貫・常東の4カ所に炭生跡があるが、金吹と東切貫の炭生は規模が大きく、大がかりな採炭をしたようである。現在は、東切貫の炭生跡は、記念樹の椿苑となっている。



### ②中山炭生の炭生跡

常盤池の北側にある山炭生は、常盤池の築堤以前から石炭を採掘していた。昭和4年の干ばつで池の中でも炭生跡が発見されている。常盤山・常盤原で石炭を掘り始めた。初期は掘り終えた炭生は埋め戻す約束事であったが、1762年頃から床波浦でも塩釜の燃料として再び中山炭生あたりで石炭を掘るようになって掘った土も一緒に持ち帰り堅穴が残った。平成14年に30ヶ所の3～7mの深い炭生は埋め戻された。現在は、2～3mの炭生跡を遺産として保存している。



### ⑤常盤炭鉱跡

現在の宇部自動車学校と高台に「常盤炭鉱」があった。昭和22年から7年間の操業で、落盤事故が一度あった。常盤池の下にある石炭は掘り尽くされた？。



埋め戻された炭生



### ⑥岡ノ辻由来の地

床波から『岡』の地に行く昔からの主要な道で、この交差点が唯一の「辻」であり「岡辻」と言っていた。右は船木方面の道、左は亀浦・草江方面の道である。

## 則貞に残る伝え話

兵右衛門さんとイモリの話、長門では「へいうえもん」と言い、周防では「ひょうえもん」と言う。則貞の伝え話では、常盤の池が造られることになり常盤原を出て行く住民に、長であった兵右衛門は、「屋敷を確保しておくので困ったら帰ってこい」と言い、最後まで築造に反対したがかなわず、村を去るときに「これからは、お前がこの主となって堤を守れ」と小川のイモリに言い残した。時は経っ

てある年に大干ばつとなり、則貞の農民は本土手から大きな水車で池の水を田んぼに送った。ある夜、大風とともに大雨になった。このとき、北の方に火柱が上がり「教念寺が火事だ」と叫ぶ声を聞いてかけつけたが、お寺には火の気がなく、帰ってみると水車は池の底に倒れていた。教念寺が火事に見えたのは、あまり水を汲み出すので、池の主であるイモリが腹をひっくり返して火事に見せたそうだと。



### ⑦道しるべ

常盤ふれあいセンターの交差点に「道標」がある。

常盤池の築堤後に東西の道ができて主要な道となった。明治42年に亀浦組によって建立された。

東	・	床波	阿知須	駅
西	・	教念寺	前	藤山
南	・	草江	亀浦	
北	・	片倉	請川	

と刻まれている。



### ⑨稲荷神社跡

大正時代に木下芳太郎が、現在の噴水池周辺を購入して、吉野桜を植えて「桜山」と名づけた。花見自動車(20銭)も運行するほどの盛況であった。昭和初期に桜山一帯に金比羅宮と稲荷神社が建立され、昭和10年に市民が待望していた常盤公園桜山(5000坪)が渡邊家の寄付で買収されるまで鎮座していた。現在は、中津瀬神社に。



大正時代の稲荷神社



### ⑧飛び上がり地蔵

いつの頃から、常盤池畔に安置されていた地蔵尊が行方知れずになっていた。昭和3年に松林から頭部を見つけて新しく胴体を造り一体として本土手近くに安置された。翌年、宇部地方に大干ばつがありポンプを使って揚水する作業中に突如にして本土手の堤防が崩れ落ちた。この時に池底の泥土が盛り上がり不思議にもその上に地蔵尊の胴体が現れた。この胴に先に安置された地蔵尊の頭部をつけかえて昔の姿にし、新旧2体をならべて祀った。

向かって左側が飛び上がった地蔵尊である。現在の地蔵堂は昭和44年に本土手から2度目に南蛮車茶屋の跡地に移設されたものである。



### ⑩常盤池本土手の石積み

元禄11年(1698)に、時の領主元禄11年(1698)に、時の領主福原広俊公は家臣椋梨権左衛門俊平に命じて、則貞・亀浦の境界にあった谷間を築堤して人工池を造ったこれが常盤池である。女夫岩池側に本土手の石組みが当時の姿で存在する、女夫岩池が渇水すれば現れる。



### ⑫女夫岩池



向田兄弟の碑と南蛮車茶屋



### ⑪常盤堤の荒手東石橋

常盤池の超流堤から流れる悪水路に掛かる石橋で、防長風土記では長式間半幅四尺五寸とある。常盤池築堤に伴いできた旧道で、新道の完成後は通る人もなく崩壊寸前である。常盤に残る唯一の石橋でもある。

大正6年に常盤池の補助溜池として女夫岩の地に築堤され、常に満水状態で渇水は、3~4回しか記憶がないと言われている池が、平成18年に土手樋の漏水(国道拡張工事の不備?)で池が干上り、「⑩本土手の石積み」が現れた。調査で、烏貝を捕獲して常盤小学校の水槽に移した。



⑬周防・長門の国境碑

国道190号線の分離帯に国境の石碑がある。吉敷郡は周防の国、厚狭郡は長門の国であった。常盤校区は両方にまたがり、昔は大沢組と亀浦組でいさかいが多かったそうである。



⑭女夫岩の滝

女夫岩池の超流堤の悪水路にある滝である。滝に水が流れ落ちるのは、田植えの時期におこなわれる常盤池の放流か豪雨のときくらいであろう。ひとときの癒やしとなる滝である。



⑮常盤堤の東幹線水路

女夫岩と苧漕場より小高い所に、常盤池からの「幹線水路」があり常盤池が築堤された当時の水路が唯一残っている。他の水路はコンクリートで改修されている。



⑯水分

則貞にあり、水分（みくまり）といって、水の配分を調節する所をいう。草江・野中・則貞の水田に水をどれくらい流すのかを話し合い調節した場所であり、近くには水車も設置されていた。



⑰丸山街区公園の海岸

その昔は島であった。亀浦の所有であって住民が航海の安全を祈り、巖島神社が建立され「巖島山」といわれた。地元では通称「権現山」とも呼ばれた。亀浦海水浴場もあり別荘地でもあった。



⑱亀浦古墳

周防と長門の国境にあって、昭和12年頃に発見された。昭和38年に亀浦の藤田徳雄さん等が現地調査をして史跡指定となった。古墳内部は未調査である。



⑲黒崎坑道跡

大正15年に鍋島炭鉱として創業したが半年で解散し、昭和2年に庄晋太郎によって昭和炭鉱と改名して創業した。常盤海岸の沖255mでピーヤ坑用のボーリング中に炭層を確認して開坑した。



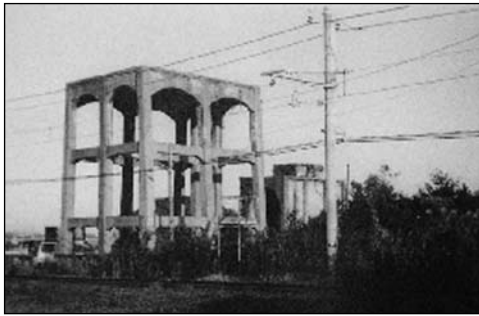
⑳長生炭鉱第3坑道跡

昭和17年に長生炭鉱の本坑で出水災害があった。その後の炭鉱再開のために試掘した坑道跡である。昭和30年ころに奥にあった坑道は埋め戻された。



㉑黒崎の炭層露頭

黒崎の東海岸にあり、以前は潜頭であったが台風などで陸地が浸食されて姿が現れた。また、黒崎の鼻は、「狼煙場」でもあった。竜王山→御崎(岬)→黒崎→日の山へと伝達された。



### ② 長生炭鉱斜坑捲き跡

大正5年に磯部啓作によって開坑したが1年で終業した。昭和4年に竹中初太郎が創業、第二笹山炭鉱の鉱業権と諸設備を継承して9月に始業。昭和8年に第一期工事が終了して採炭を開始した。昭和14年に長生行政区が設置され、翌年山田新松に引き継がれて頼尊淵之助により経営された。昭和17年2月坑口より1,010mで海水が浸入して183名の犠牲者があった。以後、第2坑としていた③1東郷炭鉱と黒崎試掘坑で操業再開を試みたが廃業となった。海中には遺構のピーヤ坑がある。



### 今も残るピーヤ坑 (ピーヤ工法の豎坑)



### ③ 長生炭鉱駅跡

昭和13年に、当時の宇部鉄道(株)が長生炭鉱停留所を新設した。昭和18年宇部線の国有化と長生炭鉱の廃業に伴い廃止された。



### ④ 長生炭鉱の火薬庫跡

常盤小学校の通学路沿いにある。操業当時はダイナマイトを収納して暴発に備えて壕になっている。



### ⑤ 国民宿舎跡

現在の常盤公園事務所前にあった宿泊施設で、昭和43年に開館したが、利用客減少で閉館となった。今は、蘇鉄と石垣が残っている。



### ⑥ 県営常盤用水路

かんがいようすい ころぎょうようすい 灌溉用水、工業用水を確保するために、昭和18年に5年の歳月で完成した。平成19年に経済産業省の「近代化産業遺産」に指定されている。(薬草園が隣接)

### ⑦ ときわミュージアム

昭和40年に、故伊藤芳夫博士の偉業を残すためにサボテンセンターとして開館した。平成7年に老朽化で建て替えられて熱帯植物館として再デビューした。平成19年に「ときわミュージアム」に改称。



### ⑨ 石炭記念館

昭和42年に宇部から炭鉱が姿を消してから2年後の昭和44年に石炭で栄えた宇部であり、その歩みを永く後世に伝えるため、宇部炭田発祥の地である常盤に日本で最初の記念館が建設された。展望台は東見初炭鉱の豎坑捲きヤグラを移設した。蒸気機関車「D5118」は、美祢から宇部港まで石灰石専用列車を牽引したが、昭和47年12月に引退して静態保存されている。萩原守衛の彫刻「坑夫」は、宇部炭田発祥の地を記念して設置された。



「坑夫」の像



### ⑧ ときわ湖水ホール

平成3年に完成したカルチャーホールで、400名を収容のイベントホール、彫刻展示室、レストランなどを備えた地域文化と憩いの場として活用されている。

せきたん きねんかん おくがい せきひ  
**石炭記念館の屋外にある石碑**



むかえ だきょうだい ひ  
**向田兄弟の碑**

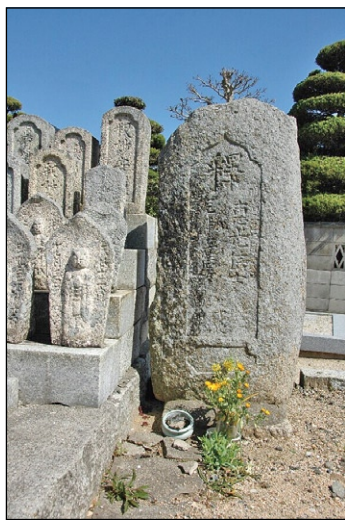


ろっかくむしわく きねん ひ  
**六角蒸粋記念碑**



さる たひこのおおかみ  
**6 猿田彦大神**

てんそんこうりん  
 天孫降臨の際に、道案内のために、途中木にぶら下がって待っていた神様で「道案内の神」「道の神」といわれる道祖神である。



むかえ だくじゅうろう はか  
**8 向田九重郎の墓**

なんぼ  
 南蛮車が発明されたのは天保11年(1840年)のことで、亀浦の農民である向田九重郎と兄の七右衛門である。九重郎の娘婿である茂七が琴芝の西沢で炭坑を始めたが、このあたりは無毛上といわれ砂石まじりの崩れやすく多くの水が湧き出るところであった。九重郎に相談した。兄と三日三晩考えて造ったのが「南くによしとうすけ蛮車」である。後に、國吉藤輔が新式に改良考案した。



はちおうじじんじや  
**1 八王子神社**

鳥居には文化6年(1809年)と記されている。八王子神社は、享和年間(1801年)大沢と論瀨を併せた大沢組の鎮守として西岐波の南方八幡宮から分社した。八王子として素戔鳴尊を祀り、この付近は蝮が多いことから毒蛇の厄払いとして大番様を、また大沢組の農産物の造仏である三条様を併せて祀った。山口宇部道路が出来たときに移設して新しく社殿を建てた。

2 岡ノ辻、3 江頭、4 論瀨、5 大沢、7 亀浦などの八王子社も蛇神様、蝮神社といっている。



いつくしまじんじや かめうらはちおうじじや  
**7 巖島神社・亀浦八王子社**

亀浦の所有であった、現在の通称「丸山公園」に巖島神社を建立して「巖島山」と呼ばれた。祠は大正6年に新しく造られている。昭和52年に宇部市に売却したために、翌年に現在地に移された。亀浦八王子社は、石川軍二さんの先祖が先亀浦の地に蝮が多く生息していたので八王子様を祀った。後に現在地の北側に移したが、明治の終わりに再び先亀浦の山林に移して祀った。巖島神社の移転と一緒に現在地に祀られている。



おか の つじはちおうじじや  
**2 岡ノ辻八王子社**



なか え がしらはちおうじじや  
**3 中江頭八王子社**



ろん ぜ はちおうじじや  
**4 論瀨八王子社**



おおさわはちおうじじや  
**5 大沢八王子社**



ちようせいたんこうじゆなんしや の ひ  
**9 長生炭鉱殉難者之碑**

昭和17年2月3日坑口より1,010mで海水が浸水した。183名の犠牲者を悼み昭和57年に建立された。



しんうらたんこうじゆなんしや の はか  
**10 新浦炭鉱殉難者之墓**

大正8年に創業し、大正10年に海水が浸水して、34人の犠牲者がでた。翌年東郷炭鉱として操業を再開した。



### A 迫田の坂

迫田の地にある。床波から善和へと抜ける旧道で、昔は重要な道であった。通称「さこんたざか」と言うが、「さこんた」とは、水田に灌水するための足踏み式水車すいしゃのことで、この坂道は粘土質で雨が降ると二歩上がって一歩下がるほどで「さこんた」を踏む様子に似ていることから、この呼び名がある。



### C 馬守り坂

野黒目から大沢県営住宅に上がる坂道がある。昔は、岐波から新川方面に行く公道であり、馬が大変苦勞する坂道であった。馬を大切にすることから名付けられた。この坂には「一人で通ると馬の首が下がる」という伝説がある。夜明け前に、坂の下に馬車や車力を引いて集り、助け合っ坂を上がるための「教訓」でもあった。馬の首が下がるとは、日本の各地に現れる「さがり」という妖怪で路傍の柿の木に馬の首だけがぶら下がり通行人を驚かせた。



### 妖怪も現れた坂



### B 子落とし坂

萩原団地から自動車学校入口に抜ける道で、今は、車が往来する坂道に整備されているが、昔は大変な岩道で背中に背負った子どもがずり落ちるほどの急な小道で、近道として使われた。



### D 塚穴坂

常盤池ができるまでは、岐波村から「馬守り坂」を通り草江方面に行く公道である。常盤で一番の急な坂道で、油断すると荷車が暴走する事故が多かった。坂を下ると直ぐに「瀬戸の坂」がある。



### ⑩ 常盤小学校

昭和 53 年に、常盤校区（昭和 60 年設定）予定の恩田と西岐波小学校に通う児童 774 名で開校した。校章は、中国原産の「トキワレンゲ」と宇部市章が黄緑色にデザインされている。

## 鍋島のはなし

風土記に『鍋島は、防長の境にして干汐の時は往來自由なり』また『床波黒崎より西南六丁（約 600m）程沖にあり、惣廻り九十間（約 130m）程人家無の松立少し有の候事』とあり、小郡宰判の管轄で岐波村にあった。

古い地図にも描かれて船が航海するときの目標とされていた。由来は、国境の鼻からみると鍋を伏せた形であるので「鍋島」という。平成 11 年 12 月に山口宇部空港の滑走路延長で姿を消した。島に祀ってあった住吉社と巖島社を合祀していた祠は、床波漁港沖に移された。



昭和40年潮干狩りで賑わう

# 常盤にある地名の由来

## ときわいけ 常盤池

常盤は「トコイワ」の約で、永久不変の岩のことを指している。本土手は断崖絶壁の深い谷であり、岩盤の上に石積みして築堤されている。

## ろんぜ 論瀨

黒岩線の道路沿いには、周防と長門の国境が通っている。そこで、「ここは周防だ」「いや長門だ」と境界争いで論議したが解決せずに、話は「瀨」にのぼったことから「論瀨」となった。境界近くには「論瀨」「論議」「論義」などの地名があり、問題ごとがあれば話し合う場所でもあった。周防は小郡宰判、長門は船木宰判の管轄であった。

## おおさわ 大澤(大沢)

その昔、この地を開墾して農作物が収穫できる恩沢(恵み)を授かったことにちなんで、初めは「恩沢(おんたく)」と称し、その後大沢(おおたく)となり、さらに現在の「おおさわ」になった。この地域では、農産物の造仏である「三条様」を祀る。

## あげば おこぎば 揚場・苧漕場

常盤池が出来る前には、常盤原にあった二筋の川から女夫岩の地を通り瀬戸内まで塚穴川が流れていた。この川を舟でさかのぼり、常盤原へ生活物資を運んで荷揚げしたのが「揚場」である。途中で底の浅い小舟に荷物を積み替えたり、舟を係留した場所が「苧漕場」である。常盤池の普請が始まると常盤原の住民は梶返や大沢などにも移住した。

## かめうら 亀浦

由来は、色々あるようだが「亀の浦」説が理にかなっている。常盤の海岸には、時々海亀があがっていた。また、空港の沖には「亀ヶ瀬」という名の瀬もある。風土記に『宇部郷之内亀浦にては畠多く琉球芋菜園物等余分作り立、売払候渡世之一助にも仕候』とあり畑作の野菜が多かった。



鍋島海岸大浴の洞窟



昭和25年が最後の海亀

## えがしら 江頭

「江(え)」は、海の一部が陸地に入り込んだ所の意味で、沢波川や江頭川の中流までは入り江だった。そこで、入り江の「頭」に当たるところから「江頭」という地名になった。近くには『炭生野』と言う地名もあり、塩釜の燃料に使う石炭を掘った。

## えぐち えがみ おくはま せと 江口・江上・奥浜・瀬戸

現在の塚穴川に沿って宇部線の山手まで入り江であった。江の入口で「江口」、その上に「江上」、奥にあった浜辺が「奥浜」さらにさかのぼって狭くなったところが「瀬戸」、「苧漕場」などと海や舟に由来する地名である。

## つかあな 塚穴

昔は、土葬の風習があり深い穴を掘って死者を埋葬した。年数が経つとその場所が陥没して穴になった。これを「塚穴」といい、これがそのまま地名として残った。